

第1回 東京芸術文化評議会 議事要旨

- 1 日 時 平成19年3月13日（火）午後1時から午後3時まで
- 2 場 所 東京都庁第一本庁舎7階 大会議室
- 3 出席者 石原都知事
安藤評議員、鳥海評議員、野村評議員、福原評議員、宮本評議員、森評議員
逢坂専門委員、太下専門委員、菅野専門委員、熊倉専門委員、小林専門委員
杉浦専門委員、高萩専門委員、長田専門委員、西巻専門員、吉本専門委員
- 4 次 第
 - (1) 会長、会長代理の選任
 - (2) 諮問
 - (3) 東京・日本の文化施策について
 - (4) その他
- 5 発言要旨

杉谷文化振興部長

ただいまより、第1回東京芸術文化評議会を開催させていただきます。

本日ご出席いただいております評議員の方は6名で、評議会開催に必要な定足数に達しておりますことをご報告申し上げます。なお、本評議会は原則公開とし、総会の内容は都のホームページ等に掲載し、公表させていただきます。

それでは、まずは会長の選出をお願いしたいと存じます。会長は、評議員のうちから互選するようになっており、ご意見を頂戴したいと存じますので、よろしく願いいたします。

安藤評議員

福原さんがいいのではないかと私は思います。

杉谷文化振興部長

安藤評議員から、福原評議員がご適任とのご発言がございましたが、よろしゅうございますか。

〔「賛成です」との声あり〕

杉谷文化振興部長

福原評議員が会長に選出されました。会長からごあいさつをいただきたいと思います。

福原会長

私はどちらかというと中立の立場でございますので、皆様のパイプ役といえますか、まとめ役に徹させていただきたいと存じておりますので、どうぞよろしく願いいたします。

杉谷文化振興部長

ありがとうございました。それでは、以後の評議会の進行を会長にお願い申し上げます。

福原会長

それでは、進めさせていただきます。初めに、会長代理の指名でございますが、会長に事故があるときは、あらかじめ会長が指名する評議員がその職務を代理するとされておりますので、私からその指名をさせていただきたいと思います。鳥海評議員に会長代理をお願いしたいと存じますが、鳥海評議員よろしいでしょうか。

それでは、ご同意いただきましたので、鳥海評議員が会長代理ということでよろしくお願いいたします。

本日は、当評議会に対して石原知事から諮問がございますので、まずそれをお受けしたいと存じます。

〔知事から会長へ諮問文手交〕

福原会長

諮問事項は、「世界文化都市・東京を実現するための文化戦略」のほか、「芸術文化活動に対する支援のあり方」及び「都立文化施設のあり方」並びに「オリンピック文化プログラム」の計4件でございます。

ここで、石原知事からごあいさつをいただきたいと存じます。

石原知事

本来は、こういう機関が国にも都にもとつくにはいけませんが、やっと誕生の運びになりました。文化に関するだけではなく、日本という国は戦後、グランドストラテジー（総合戦略）が全くなくなってしまった。ストラテジーがないから戦術も出てこない。文化というものの進展は、お酒のカクテルと同じように、いかに物事を混ぜ合って違う味を出すというか、アフィリエイト（合わせる）するかということだと思いますが、そういう手だてを助長する仕組みというものが行政に関してはほとんどございませんでした。

錚々たる専門委員の方々がいらしているので、一緒に並んで議論したらいいと思います。専門委員の意見を聞きながら、評議員の方々が戦略を立てていくことになると思いますが、ファインアートのコンテンポラリーアートに限らず、これから特に日本のような国で、理想の高度な文化のカクテルというものが誕生していけば、これがまたひとつの日本の存在

感につながるし、国力にもつながっていくと思います。

私は日本というのは独自の文化をつくってきたと思うし、それだけの感性を備えた民族だと思っています。また、日本人という独特の形で生きた混血民族ゆえに、そういう仕事もできたのではないかと考えております。

皆様をお願いしたいことは、荒唐無稽でも結構ですから、そういう提案を出していただきたい。専門委員の方々も含め、東京が爆発すれば、かなり荒唐無稽なことができます。奇をてらわず、失敗を恐れずに、何か画期的な具体的なプログラムというものを皆さんの討論の中から採れんして、幾つでも出していただきたいということをお願いする次第です。

福原会長

これから審議に入りますが、その前に、今日のご都合により宮本評議員が途中でやむなく退席されますので、最初に宮本評議員のご所見をお伺いしたいと存じます。

宮本評議員

東京にはとても優れたホールがあり、多くのアーティストが世界から集まってきましたが、マーケットとして認知されていても、そこで公演をすることが世界的な評価につながりにくいという側面もあります。どのようにして東京での公演がアーティストとしての評価につながるようするかという課題があると思います。

本当に音というのは、その瞬間の芸術と言うと口幅ったいのですが、消えていってしまうものです。いわゆる時間を過ごすということしか我々は提供できないので、その時間を過ごすということの上手な導き方といいますか、演奏だけではなく、そこへ行くまでの間、あるいはそこにいる間、あるいはそこに行くんだという考えを持った瞬間に、特別な時間が過ごせるんだという気持ちを与えてあげることがとても大事なことだと思っています。

そしてまた、西洋音楽は、生まれてから数百年たっても、嘗々と演奏され続けており、世界の共有文化ととらえることができると思いますので、この分野でも、日本人も捨てたものではないということを具現化していくような提案できればと考えております。

福原会長

今日は第1回ですので、議論の前に、評議会の仕組みでありますとか、東京の文化施策などについて、概観をしていただきたいと思いますので、事務局からお願いします。

杉谷文化振興部長

〔東京芸術文化評議会の意義、東京の文化施策に関する説明〕

福原会長

お聞きのとおり、今回は専門家の方々によって、広く深く長期にわたる文化政策の提言もできるということで皆様をお願いしていると伺っております。

また、オリンピック招致についても、単に国際的なスポーツのイベントというだけではなくて、同時に文化プログラムも要求されるというような世界の状況でありますので、それについてもお役に立つ部分があるのではないかと考えております。

それでは、今回の諮問事項についての皆様のお考え、あるいは現在の都の文化施策へのご意見、あるいは今後の方向などについてご提言を、自由な立場でご発言をいただければと思います。恒例により、あいうえお順で、安藤評議員からお願いします。

安藤評議員

ミラノにサローネがあり、ベニスにはビエンナーレがあります。その期間、大変多くの人々が集まってくるわけですが、これに目をつけたのが、上海、広州にもビエンナーレができました。アブダビでは、石油のあるうちに観光資源をつくらうということで、ルーヴルやグッゲンハイムと提携して運営する美術館や、パフォーマンスアーツセンターなどの建設計画が進められており、私は海洋博物館の設計を依頼されております。

東京も、観光になるべき建物は結構ありますが、今はばらばらです。ミッドタウンに三宅一生さんが運営する「21_21 DESIGN SIGHT」をつくっておりますが、そこからデザインを世界に発信する。日本は、ファッション、芸術、建築、それから車、テレビ等のデザインというのは世界で一番だと思えます。そういうものを発信する新しい若者の場所をつくらうとしていますが、その横にサントリー美術館があり、国立新美術館もできました。森美術館も上にあり、そのあたりでビエンナーレをという雰囲気は少しあります。

六本木ヒルズもミッドタウンも屋外はきっちり空間がありますので、そういうものも使いながら、ベニス・ビエンナーレよりも大きなスケールで国際的に発信できるのではないかと。あのあたりの人たちが参加すれば、もう1つの顔ができるのではないかと思いますけれども、今ちょっと盛り上がってきていますから、それをうまく後押ししていただくとうれしいなと思えます。

福原会長

東京でも同じようなことは次々と考えられるわけですが、それが一貫した政策で行われていない。だから、これから先、この都市をどういう方向に持っていくということを決めてから、同時にそれをスタートするということが望ましいのではないかと思います。

安藤評議員

ベニス・ビエンナーレは、もう100年ですよね。だから、時間がかかると思うのですが、だんだん広がっていく。今、その下地をつくっておかないと、ずっと顔のない都市・日本と。東京は、日本の顔ですから、顔から何かをやってもらうといいなと思います。

石原知事

横浜でやったトリエンナーレは、プロデューサーが毎回違うのですか？

福原会長

変わります、1回ごとに。横浜のトリエンナーレの場合は、海外のアーティストも招いており、海外からのお客もそれなりに来ているようですが、横浜市民があれでものすごく意識が高まるんです。多くのボランティアを含め、協力者がある状況だと思います。

鳥海評議員

この会は、大きなビジョン、テーマを決めていかないと戦略が出てこないと思います。例えば日本としては、ハーモニー・オブ・ピープルとか、ハーモニー・オブ・ネイチャーというようなものは非常に重要なので、そういうテーマでオリンピックまで持っていくという形にしないと、なかなか一つにまとまっていけないという気がします。

もう一つは、東京の中の一つ一つの地域を活性化して、それをどうやってつなげていくかと。今、大手町と丸の内、有楽町、それに対抗して、日本橋の方も同じように固まってきました。両地域で無料巡回バスを出していますが、これをつなげて地域を広げていく。

もう一つは、メディアをいかに我々の味方につけるか。これは絶対大切だと思います。東京国際フォーラムのラ・フォル・ジュルネ、非常に成功しています。これは、我々よりもメディアが宣伝してくれたということがあります。特に世界に発信する場合に、メディアとの協力体制をどうやって構築するかということが非常に重要だと思います。

それから、私が非常に心配しているのは、どんどん若いアーティストが海外へ行ってしまうこと。日本へ呼び戻して、反対に発信していかないと日本の将来はないのでは。

そのとき、いかに応援団を多くするかが重要ですが、子どもから年寄りまでつながってくるような横断的なものを考えていかなければいけないと思います。

森評議員

美術館をやっている、外国と日本の一番大きな違いは、外国は美術館を国の威信をかけてやっているというようなことが感じられます。日本は、国も地方自治体もそういう意気込みが感じられない。森美術館は3年になりますが、7年前ぐらいから世界を回って、外国の美術館も勉強し、世界の名だたる美術館の館長さんにアドバイザー・コミッティの

メンバーになっていただいております。たまたま2月に、そのメンバーである、モマ、テイト、ポンピドゥーの館長の方々も来ていただいて、アドバイスをいただきました。

今、ルーヴルやグッゲンハイムなど、皆さん拡張計画の真ただ中です。一次的な目的は、膨れ上がったコレクションを見せる場所を得ることですが、それをランスとかメストとかビルバオにつくり、その地方を大変活性化することになっている。ポンピドゥーの場合は、政府が75%の資金を出す。残りはメス市が出して、運営費も市が出すという形です。一方、日本はまだ税制の優遇も、経済的援助も、プロモーションも足りない。そういうことを考えると、本当に意気込みが感じられないなと思います。

また、こういう開発は、点から、それをつないだ線になって、線が面になる開発にしていかないと活性化しない。都でもいろいろな施設を持っておられますけれども、それだけではなくて、インフラも含め、面的な開発をして、地元の人にも喜ぶような形でやってこそ地元で根づく文化になると思います。

福原会長

美術館はその土地の文化力を高めることだけではなく、次代を担う若い人たちの文化力を育てる役目がある。また、新しい美術館は、その地域のシンボルになると同時に、訪れる観光客も増え、住民を活性化するという役割がある。六本木に新美術館ができたからというだけではなく、面的に、有機的に生かしていくにはどうしたらいいかという課題であり、これからは是非検討していきたいと思います。また、日本は、寄附金税制のハードルが非常に高いものですから、民間資金を吸収することが非常に難しい。この問題は、国に考えていただく必要があると思って、都としてこれを提言してもよろしいでしょうね。

石原知事

これは、上限なしで本当はやるべきですし、都は国に揺すぶりがけようと思って、地方税での優遇措置みたいなものを考えているのですが、たかが知れたものです。所得税の中での上限なしの文化教育に対する寄附行為というのは、免除しなかったら民間のために使えないですから。

野村評議員

常日ごろ都の文化政策、あるいは事業展開を拝見していて、現代芸術といいますが、西欧芸術が重きをなしているな、というふうに率直に思っております。それは、写真美術館をはじめ、東京文化会館、江戸博はありますけれども、都の美術館、箱ものからのイメージが非常に大きくあるせいかなとも思うのですが、例えば安藤先生にお願いして、伝統芸

術を意識した恒常的な事業展開ができるような和の空間が、都の施設として何としても必要なのではないか、そういうところから、海外発信なり、アジア・西欧の芸術との融合とか、そういう問題に広がっていくのではないかと考えております。

例えば日本の文化の根幹にある、言葉で言えば忍耐というようなものが若者に向かっての文化政策の中に加わっていくようなことが大切なのではないかと考えております。

福原会長

日本は一生懸命西欧化し、自分を失ってしまったところがある。日本の文化とは何なのか、あるいは日本とは何者なのかを表現できるような空間が要るのかもしれないね。

野村評議員

日本の文化に接するのに、みんな京都とか奈良へ行ってしまわずに、東京が発信地であるという、そういう位置づけが何としてもなくてはならないと思いますね。

石原知事

問題提起というか、幾つかアトランダムに申し上げますが、1つは、4つの大学を統合して首都大学東京にいたしました。ここでパウハウスのようなものを育てたいのです。

次は、全く関連ありませんが、大小・公私合わせますと、東京ほど美術館・博物館の多い首都はない。これがほとんど活用されずに眠っている。つないでめぐる観光ルートもありませんし、どこに何があるか、何が催されているかという情報に対するアクセスもない。

それから、都も地方税で芸術文化に対する寄附控除を考えていますが、何分額が知れたものにしかないけれども、ひとつ国に突き上げていきたいと考えています。

それから、先ほどルーヴルの別館ができて、その町が非常に栄えるという話がありましたが、美術に関するテーマパークというか大モールというか、例えば箱根の彫刻美術館のようなものも考えていただければと思います。

それから、野村先生が言われた古典芸能をもっとポピュライズして浸透していくような小屋をつくりたい。勘三郎君が浅草寺の裏につくろうとしているような掘建ての小屋で、常設で、能にも落語にも使えるようなものをどこかに。これもひとつ皆さんのお考えで。

それから、浄瑠璃や唄など、日本独特の声を発してうなる、ああいうものをうまく展開していく方法はないでしょうか。全部唄わなくても、2～3行うまく唄えると勉強する人がいるかもしれません。おもしろいなど。そういう意味でご協力をいただければと。

今の話を聞いて、若い専門委員の人たちをあんな遠くに座らせないで、次は同じテーブルに。

福原会長

では、皆様も手を挙げていただいて、ご意見を、是非お願いいたします。

杉浦専門委員

例えば「中華中毒」という本を読んでもと、過去数千年の間いかに中国に対して周辺の国々が憧れ、また時に反発したりしながら、それぞれの都市の空間をつくってきたかがわかります。東京についても部分的にはない都市全体の空間の意義づけという作業も必要だと思う。「中華中毒」という言葉をまねるならば、まさに人々を「東京中毒」にさせるような文化的空間を創造することが必要だと考えます。

例えば、パリの街を歩いていると、シャトブリアン通りとか、レカミエ通りとか、いろいろな歴史上の人物の名前がついていたりする。今の東京の街の表示はほとんどが何丁目何番地と街角にあるだけで、通りに名前がついていることが少ないので、目的地を探すのに苦労することが多い。少なくとも23区内の通りには、歴史上その他、それぞれの土地に馴染みのある名前をつければ、東京の街を散策する際に、通りの名前を見ながら、自然にいろいろなことを想像したり、歴史を振り返ったりするようになり、楽しいに違いない。そういった雰囲気味わいながら駅を降りてから美術館やコンサートホールや先ほど話題に出たような「和の空間」へ近づいていければ、目的地に至るまでの道のりが一層意味のある空間や時間になるのではないのでしょうか。これは一例にすぎませんが、そういった種類の東京の街全体の空間演出も必要だと思います。通りの名前をつけることから、非常に楽しい作業になると思います。

熊倉専門委員

ラ・フォル・ジュルネは非常に成功した事例だと思いますが、是非東京ならではの仕組みで、今注目を集めているジャパン・クールの拠点としての日本を、若い人、センシティブな人、ビジネスマンなど、いろいろな視点で東京の弾みみたいなものを感じていただくための幾つかの、比較的規模の大きな、面的な措置が必要ではないかと思っています。

文化コーディネーターを目指したい若い人たちが日本中に大勢いて、育ってきている。そういう人たちのことを受け入れ、この評議員会みたいのところまで吸い上げられていったら、東京のイメージが変わるのではないかと思います。

全然専門的な意見ではないですが、東京で一日、都民がみんな和服を着て仕事する日とかが年に1回くらいあったら、ものすごく楽しいのではないかと思います。

石原知事

東京中毒はとても大事なコンセプトで、その最たるものは秋葉原です。芸術と関係ないのですが、世界中にこんな街はないですから。あれほど日本の技術開発の伝統が重なっているところはない。人がすれ違えないぐらいの通路に、なくなったはずの真空管とか、敗戦直後の道具とか売っている。そういうものをぜひアートの世界で考えていければと。

私は大道芸能人が好きなものですから、ヘブンアーティストをやっているのですが、どこから集めて縛ると言うとおかしいけれども、大きな行事があれば芸人たちと一緒にやったりしていますが、そんな可能性もある。

ワンダーサイトは非常におもしろいことをやりました。野村さんが来ているからぜひ、ああいうところで狂言とか、子どもたちにさせると、遊びの中に溶け込む要素ができるのではないかと思います。いろいろご指導ください。

福原会長

ここで、蜷川評議員が今日欠席でございますが、ビデオレターを送ってきていただいておりますので、それを拝見して、それからまた進めたいと思います。

蜷川評議員（ビデオレター）

東京で世界的に誇れるような大きなフェスティバルをやっていただきたい。東京が、世界中のすぐれた一流の作品を集めて、都民の方に見ていただく。そして同時に、メインの招待作品に対して、フリーといって、若者たちが自由に参加できる。街中に何百というか、あるいは夜中の12時から始まる公演、小さなところでやる公演、ストリートでやる公演、たくさんの若者たちがフリーとして周辺で参加する。我々は日本にいて、世界中のすぐれた作品を見られる。若者たちの公演がその周辺で行われる。

そのとき、例えば、築地の本願寺、あるいは芝の増上寺、そういう神社仏閣も含めて野外劇場を同時多発的にやる。日本の伝統的な建物の中で斬新な現代劇、あるいは世界から来た作品をやっていく。開かれたものと小さなところでやるもの、そういうものを等価のものとして置いて、世界中のすぐれたものを日本に持ってくる。

もう1つは、サブカルチャー全盛の時代に、素人とプロの区切りがつかなくなったときに、圧倒的にカルチャーを与える。それによって、小さい村としての日本は世界に開かれた、あるいは世界のすぐれたカルチャーと対話することによって、世界の全体性がとらえられていくのではないか。それが、私の場合には音楽と演劇なのかもしれない。パレードをしたり、総合的なレセプションがあったりして、街中賑わう。日本のどこかの地域、あるいは多発的に、寺院仏閣を使ってそういうフェスティバルが行われたらいいなと。それ

が世界性と同時に、日本性というものを同時に問うていく、そういうすぐれたフェスティバルを我々は都民の皆さんに提供して、それを見てもらえる、そういうチャンスをつくるべきではないかと思います。

福原会長

それでは、さらに、ご欠席になりました杉本評議員と三宅評議員からもあらかじめご意見をいただいておりますので、事務局から紹介をさせていただきます。

杉谷文化振興部長

まず杉本評議員のご意見でございます。2016年東京オリンピックに向けて提案させていただきます。都の管理運営する文化施設は、美術館、各種ホールと多岐にわたっていますが、芸術文化のあらゆる分野にわたる総合的なテーマに基づく大規模美術展の開催を企画すべきだと考えます。日本文化、ひいては東洋の文明がいかに関西文化に影響を与えてきたかを検証する展覧会を提案いたします。

ニューヨークのグッゲンハイム美術館では、2009年に開館50周年を迎えるに当たって、その功績を祝福する大規模展覧会を企画しています。私もニューヨークの現代美術シーンにかかわる者の1人として、この展覧会企画に参加していますが、この企画をもとに美術、演劇、音楽、建築、文学等に至るまで拡大解釈をして、オリンピックを迎えるにふさわしい大規模展として再構成し、海外からの賓客に対して、いかに世界の文化が相互に影響を受けているかを検証するまたとない機会としてこの企画をご提案する次第です。

三宅評議員のご意見でございます。現代の街に大人のものは既に十分にあると思います。むしろ、未来を担う子どもたちが集い、伸び伸びと成長していける楽しい場やパイの不足を感じます。施設はもうこれ以上要りません。子どもたちが自由に絵を描いたり、自分の手で物づくりをしたり、あるいは考えたりし、やさしさとか礼儀とかを自然に学べるような場をつくるべきだと思います。学校の校庭を芝生にして開放するような環境づくりもその1つかもしれません。10年先、20年先という長期的な視点に立って、まず東京自身が安全で未来に希望の持てる街になれるよう、今から対応すべきだと思います。

福原会長

ただいまお聞きになって、評議員の方々のご意見はございますか。

安藤評議員

いわゆる芸術的・文化的表現のできる子どもを育てる、有意義な塾というか何か、そういうものがあればいいですね。お寺の境内や何かでできれば、具体的にいいと思います。

ヨーロッパの人たちが見ても、非常にインパクトがあると思います。

石原知事

子どもが遊ぶ場所はいっぱいありますよ。しかし、結局彼らの選択の中でテレビゲームをする。これはかなり刺激的で、それを上回る、違う、もっといい本質的な刺激を子どもたちに与えないと。大自然はテレビゲームに勝るけれども、それを都会でどう与えるか、つまり芸術なり、一種の芸術に関係するワークショップが自然の与えるものの代りをどこまでできるか、難しい問題で工夫が要ると思います。ITというものもたらした、一種文明の毒というのは、子どもたちのせっかくある芸術的な情操を損ねているだろうし、そんなこともこれからの議案にして、いろいろお知恵を出してください。

鳥海評議員

子どもには工夫ですね。高校生にどういうものを見せたらよいのか。2時間ぐらいかな、勘三郎さんが工夫されて、学校の体育館を使って上演。それを見た後にワーツと大歓声です。その前に勘三郎さんはみんなから歌舞伎に対する質問を受けています。その反応は良くないが、一旦上演しだすと目をきらきらさせて引き込まれていくといったイメージがありますね。場を提供することが大事で、今、東京国際フォーラムは8月のお盆の真っ最中に3日間、子どもの日を設けることにしています。将棋とか、いろんな出しものをやる。将棋はお父さんお母さん方も一緒に。古典的な子供の遊び場もつくってやる。場を提供して実体験させてやれば活性化していくと思います。そういう雰囲気になってきます。それはやってみないと、なかなかわからないです。魅力あるイベントでいかに多くの人がある街へ来てくれるか。

福原会長

いろいろお話が出ましたけれども、冒頭に鳥海さんがおっしゃったことは、それをつなげる基本的なテーマは、東京にとって一体何だろうということですね。

もう1つ、何しろ本物を見せるということを主眼していくと、全体の文化力は上がってくることになると思います。

長田専門委員

芸術が、都民一人ひとりにとって切実なものになる仕組みがつくられていく必要があると思います。実際にはこの10何年かの間、随分献身的な新しい試みが蓄積されてきています。その取組みを代表するのがNPOなどの、いわば施設を必ずしも持っていないが、しかし、芸術を多くの人々の参加のもとにつないでいくような営みだと思います。

これらの営みを都の持っている、世界的にも誇り得る文化施設ともタイアップさせるような形で、さらに元気にさせていくようなことができないか。そのためには、お金も必要ですが、助成金や施設の援助などを通して、自主的な営みが存分にできるようなバックアップの仕組みがつくれたらと願っております。

福原会長

要するに、文化芸術は総じて公的支援みたいなものはどうしても必要なんですね。この芸術文化評議会では予算を決めることはできませんけれども、仕組みをつくるのにこのくらいの覚悟は必要だよという、その明示だけはする必要があるのではないかと思います。

野村評議員

先ほどの蜷川評議員のご提言なんか、壮大なものだと思いますが、国と民間の間で、都がどういうリーダーシップをとっていくかということが重要になるとは思います。

高萩専門委員

これだけのメンバーがそろっているので、できれば是非、国とか、ほかの自治体にも良い影響が及ぼせるように話が進めば、と思います。都だけではなく、都下の区や市と協力するとか、文化庁や地域創造など国単位のお金までも含めるような形で、芸術文化振興が考えられれば良いと思います。

また、東京には、劇場などのパフォーマンススペースが、世界で3本指ぐらいには入る数はあると思いますが、税制的な優遇は全くない。パチンコ屋さんと同じ税金を納めないといけない。文化芸術関連の民間の施設に対しても、活動を後押しするような方策がとれば、発表の場所が小さいスペースからだんだん大きい場所へ移っていくというような、東京都の中でのいい形の循環も生まれて来るとは思います。

福原会長

この評議会から、少なくとも今年末には何か発信をされる、8月の第2回を過ぎて、第3回目には発信することになるとは思います。そうすると、それに対して都民の方々が反応すれば、必ずや国の政策にも影響があるというふうに考えた方がいいと思います。

森評議員

施設にしても行事にしても、なくしたら困るという気持ちにさせていくと、予算もおのずとついてくる。ですから、なくしては困るものをつくるのが大事だと思います。

先程の蜷川さんの提言は大変すばらしいと思いました。蜷川さんが東京オリンピックの

総合アートディレクターになるのがふさわしいのではないかと勝手に思っていました。

鳥海評議員

東京の大手町・丸の内・有楽町地区で年末に300万人もの人を集めていたミレナリオが終わってしまいました。イベントも来るお客さんの質が多様化していることを考えて継続してやっていく必要があると思います。

安藤評議員

景観の問題でいくと、電柱の地中化というのがあります。日本中、これから何十年もかかる問題ですが、今回東京は結構進むのではないかと。都市の景観は一気にできるものではないですから、景観が大事だということを我々が伝えていく。自分たちの街に誇りを持つるように、適度なライトアップもあると思います。

逢坂専門委員

日本が一番弱いのは、情報の蓄積と継続、発信だと思います。どんなイベント、フェスティバルをするにしても、学芸員のレベルだけではなく、文化政策全般を考える専門集団を組織としてつくっていかないと、結局打ち上げ花火に終わってしまい、引き継がれていかない。国に先駆けてそういう専門集団をつくるのが大切ではないかと思っています。

福原会長

大変申し訳ないのですが、時間になってしまいました。申し上げましたことは、この芸術文化評議会によって横のつながりをはっきりすると同時に、縦の蓄積もはっきりしようと。ただ、長期にわたって文化政策をつくっておかなければいけないと言ったのはそれでありまして、それを管理するアートマネージャーも育てなければならないというところに戻ってくると思います。

この評議会は単なる知事の諮問機関ではなくて、自ら何をやらなければいけないかということを検討、提言することも必要ですので、文化政策のグランドデザインは東京にとって何だろうということを考えていったらいいのではと。それと人材を育てていくことも考えていくことになるかと思っています。また、我々は、ディスカッションしながら、評議会そのものは一体どうあるべきかということも考えていく必要があると思います。

そこで、審議の進め方を考えますと、どうしても専門委員の方々の専門知識に頼ることが必要になると考えています。諮問事項の検討スケジュールもございますので、それをどのように考えていくのか、事務局からご説明いたします。

杉谷文化振興部長

平成20年3月ごろに中間のまとめを、平成20年8月にはオリンピック文化プログラムについての答申、そして、平成21年3月ごろには、お出しいただいたことの全体に対する最終答申をいただきたいと思っております。

なお、事業を進めていくためには毎年8月ぐらいが予算要求の時期になっておりますけれども、諮問事項のうち、「世界文化都市・東京を実現するための文化戦略」に関しましては、そういったご提案につきまして随時、事業化、予算要求をし、可能なものはこの夏の平成20年度予算要求に反映してまいりたいと思っております。

福原会長

今回いただきました諮問は、この夏の予算要求への反映がございまして、オリンピック関連の文化施設というような極めて専門的な事項を端的に、集中的に審議しなければならないということですが、この評議会を頻繁に開催することは事実上困難であり、各テーマについて、審議のために必要な調査をしていただく、あるいは審議をしていただくことが必要だと思っておりますので、先ほどの資料説明で示されたとおり、部会にご活躍をお願いすることになると思っております。部会は会長が指名する専門委員をもって構成することになっておりますので、各部門の編成については会長にご一任いただきたいと思っております。

実のある提言をするためには、検討を十分する必要がありますので、都は部会の求めに応じて各局の部門を通じて詳しく説明をしていただくことが必要になると思っておりますので、その点は都の各局についてお願いしたいと思っております。

予定の時間を過ぎかけておりますが、今日の議論は盛り上がったところですがこれまでにいたしまして、次回のスケジュールを事務局からご説明いただきます。

杉谷文化振興部長

今回は各テーマについて部会の調査研究などをもとにご審議いただきます。「世界文化都市・東京を実現するための文化戦略」、都立文化施設のあり方に関する検討会の議論を引き継ぐ形での東京都美術館の新規事業につきましては、その段階でご提案をいただければと思っております。「オリンピック文化プログラム」につきましては、草案をもとに意見交換をさせていただきたいと考えております。

鳥海評議員

これから、いろいろな話が出て、事前に漏れるのは……。ここは正式の会議なので結構だと思うのですが、個々の話は……。

杉谷文化振興部長

部会につきましては非公開ということで、公開する場合は適宜、部会とか評議会のご了解を得て公開できますけれども、原則は非公開でやらせていただきます。

福原会長

よろしいでしょうか。それでは、これで第1回を終わらせていただきます。

午後3時00分閉会